

オランダ東インド会社にとっての中国

奈 良 修 一

世界最初の株式会社と呼ばれるオランダ東インド会社 (Verenigde Oostindische compagnie: V.O.C.) は、一六〇二年に成立し、一七九九年に解散するまで、名前の通り東インドとの貿易を目的とした会社である。しかし、一七世紀においては、その貿易における収益のかなりの部分は、東アジア、特に日本との貿易によってあげられたものであった。このためか、いままでの日本におけるオランダ東インド会社の研究においては、日本との関係に焦点を当てたものが多い。しかし、オランダをはじめ、ヨーロッパの人々にとって、インドの先にある豊かな土地は、「China: シナ」であった。この国が、豊かな国であることは、マルコ・ポーロの『東方見聞録』にも書かれており、コロンブスの航海にも影響を与えていることは有名である。オランダにとっても、東方に航海してきたときには、インドの次に、中国との交易を考え、直接の関係を持とうと試行錯誤を繰り返していた。

本論では、このオランダと中国の交易関係を概観し、オランダにとっての「中国」を考察し、近世における東方アジアの実態の一端を考察したい。

オランダ人の「シナ」に関する情報

オランダ人にとって、「シナ」のことにふれた最初の文献は、ゴンサーレス・デ・メンドーサ (Gonzalez de Mendoza) の

『シナ大王国誌』である。⁽¹⁾この本は、最初、スペイン語で書かれ、ラテン語、イタリア語などに訳された後、一五九五年にオランダ語に訳されている。次に重要なのは、一五九六年に出版された、ヤン・ハウフェン・ファン・リンスホーテン (Jan Huygen van Linschoten) の『東方案内記 (Itinerario)』である。⁽²⁾この本の中国に関する部分は、メンドーサの『シナ大王国誌』からの引用が多いとは言え、インドに向かうオランダ最初の艦隊が、リンスホーテンの書を持って、航海に乗り出していることから、その影響力の大きさを認めるべきであろう。⁽³⁾

この本の中には、「シナ」に関して二章が設けられている。それらは、第二三章「シナ国のたいそうな豊沃さ、富裕さ、強さ、その他、同国の注目すべきことについて」、第二四章「シナ王国の省、都市、その他記憶すべきことについて」、第二五章「ポルトガル人が居住して取り引きをしているシナのマカオの町とその島、ならびに、かれらの交易、商品とその若干の価格とともに、シナとマラッカで日常用いられている度量衡と通貨について」である。⁽⁴⁾

第二三章には、中国の豊かさを次のように述べている。

国土は良い空気と温暖な気候に恵まれてきわめて肥沃、あらゆる物産が溢れるばかり豊かで、玉蜀黍、米その他この種の穀類は一年じゅう蒔きつけて刈り取られる。奥地には若干の象、獅子、虎その他の猛獣がいる。また、麝香をもった動物がたくさんいる。(中略)馬もいるが、ヨーロッパのより小さい。鶯鳥、鶏、家鴨などはすこぶる豊富である。

河にも海にも魚がひじょうに多く、あらゆる食糧、必需物資に恵まれている。この国には金、銀の鉱山が多い。しかし王はその採掘を許さない。というのは、自国の宝庫としてそれを抑えているからである。だから、かれらはそれらを全部国外から入手せざるをえないにもかかわらず、たいていどの家にもみな金、銀、宝石その他たくさんの方財宝が蓄えられているのである。かれらは金よりも銀の方をより高く評価する。なぜなら、金にはいろいろの品位、価格があるのに対して、銀はつねに一定した価格をもつからである。真珠やアルジョーフアルも多量に産するが、これらはアイナン〔海南〕の島とその省から来る。水銀、銅、鉄、はがね、ブリキ、錫、鉛、硫黄、その他これに類する金属も多く、そ

れから琥珀も。シナの王は、これらすべての富と測り知れない歳入をもつほか、各省の首都にはいずれも莫大な宝を集め隠しているとのことである。

この国では絹物を着るのがごくふつうの習慣であって、これらの土地〔ネーデルテント地方〕で粗末な毛織物を着るようなものである。絹、縞子〔サターン〕とか、あるいはまた美しい彩色と刺繍を施した金欄、銀欄の紋織りを靴にいたるまで着用するのである。国じゅうに絹がふんだんにあるからで、真実として人の確言するところによれば、カントン市からだけでも毎年三千キントールあまりの絹がインディエに運び出され、すべて目方で売られるという。絹は年々ヤパン〔日本〕島、ルソンすなわちフィリピーナス、シアン〔シャム〕国その他周辺諸地域へも輸出されるが、それでも国内には全船隊に積載できるほど大量に残っていて、ちっとも不足することがないのである。麻や綿も多量にあり、ひじょうに安い値段で驚くほどである。

(中略)

この国には砂糖や蜂蜜や蝨も豊富で、また各種の薬草とか根とか、本草の値段がすこぶる安い。そこにはまた、これらの土地〔ネーデルラント地方〕の果実はみなあって、スペインよりもはるかに多く、当方では知られていない果実がなおいろいろあり、その甘味において砂糖をしのぐオレンジがある。レチアと称する果実がある。すもものに似るが、味は異なる。ひじょうに美味で、これを味わったことのある者はこぞってほめそやす。要するに、人の考え得られるもの、渴望するものがすべてであるのである。

シナ王のもつ領土とその権益はめっぽう大きくて、お話してもとても信じてはもらえないほどである。たとえば、カントン省の塩の河―そこで塩が作られる―の通行税だけでも、年に一五〇万金〔一五〇万両の意か〕にのぼるのであって、これをもって他は推して知ることができよう。⁽⁵⁾

この文章からわかるとおり、「シナ」は、豊かな土地と認識されている。土地が肥沃で、食物が豊富。さらに、ヨーロッパ

にとって豊かさの象徴である、宝石や絹の豊かな場所である。さらにここでは、金よりも銀に価値を置くことが記されている。さらに、

この国にはまた多くの立派な大学や研究施設すなわち学校があり、そこで哲学や国法を学修する。シナにおいては、なんびともその人の素姓とか財産によってではなく、もっぱらその学問ないしは知識によって尊敬されるからである。あらゆる都市の役職に就き、また政務にたずさわっているのはそういう人々であって、畏敬の念をもって実におもおもしろく遇されている。かれらはきわめて安楽に生活しており、神々のごとくに尊ばれている。⁽⁶⁾とあるように、身分による差別がないことが書かれているのである。当時のヨーロッパにおいては、身分制の壁がまだ厚い時だけに、この話は驚きをもって伝えられたのであろう。ここに記されている「シナ」は、ヨーロッパ人にとっては理想郷であった。

これらの情報をもとに、一五九六年に、コルネリス・ドゥ・ハウトマン (Cornelis de Houtman) 率いる艦隊がインドを目指してオランダを出航した。この艦隊は、ポルトガルの勢力の弱い、ジャワを訪れ、今後の発展のための基礎を築いたのである。この艦隊は、結局、中国にまでは至っていない。しかし、ジャワにおいて、中国商品の重要性を再確認し、中国から来た商人との取り引きを行っている。⁽⁷⁾

「シナ」(明朝)との接触と台湾

中国と最初の接触をしたのは、ウェイブラント・ファン・ワーベック提督 (Admiraal Wilbrand van Warwijck) 率いる艦隊であった。この艦隊は、一六〇二年にオランダを出航し、一六〇四年にジャワのバンタムに到着している。この艦隊は、そのはじめより、「シナ」との交渉を目的としており、パタニを訪れてこの交渉のための準備を整えた。この地で、オランダ

語のできる中国人を雇い、さらに、水先案内人と書記の計四人の中国人を雇った。その他、中国系のシャーバンドルから福建省漳州の大官宛の手紙を書いてもらっている。⁽⁸⁾

このような準備をした上で、一六〇四年に福建省漳州に來航した。この時、福建には、宦官高宥が、市舶提舉司として赴任していた。オランダの提督ワーベックと宦官との交渉が始まったのである。はじめは順調に運んだようにみえたが、結局は成功しなかった。明王朝がオランダとの貿易を嫌ったと言うよりも、それまでの海上貿易ネットワークを維持していた中国海商が、新たな競争相手の出現を嫌ったと言うのが事実のように思われる。

この後、何度か、VOCは、中国との直接交易を求めたが、遂に成功し得なかった。さらに、一六二四年一月一日には、バタヴィアに中国からの使者を迎えるまでに至ったが、結局は成功しなかった。失敗に至った理由は、オランダは、澎湖島に住し、貿易を続けようとしたのに対し、中国側は、外国人の中国国内居留を認めなかった点、さらに、オランダ側が自由貿易を望んだのに対し、中国側は、朝貢貿易しか考えていなかった点にある。このことは、『バタヴィア城日誌』一六二四年一月一日の条に次のようにある。

使者が口頭にて言明したる所によれば、彼等の使命は総督閣下が司令官ライエルセン (Commandeur Reyerssen) の中国沿岸における行動を熟知せるか、また同司令官が中国領域内の澎湖島に城砦を築きたるは総督の命令によるかを明らかにするに在り。また同司令官は最初、友誼をもって澎湖島における中国貿易の許可を求めしが、古来の法律に基づきて (法律はいかなる国民にも中国の領域内において貿易し、または居住することを許さず) これを拒絶されたる後、多数のジャンク船を捕獲焼沈し、多数の中国人を捕虜とし、中国大陆において数回の襲撃をなしたること、また同司令官が兵を蔵めたる後、自ら福州の知事の面前に來たり、再び澎湖島における貿易の許可を求めたること、また知事は同司令官もし船および兵を率い、澎湖島を去らば、中国の領域外において貿易を許す約束をなしたること、また司令官が総督の命令を受くるにあらざれば澎湖島を去ること能わずと答え、知事に対しジャンク船を出して数人の使者をバ

タヴィアに派遣し澎湖島を去ることならびに中国の領域外において他の貿易地を選定することにつき交渉せしめんこと
せ請いたる由を告げたり。⁽⁹⁾

ここに記されているとおり、オランダは、友好的な交渉がうまく行かないとなると武力を用いて、中国の船を略奪していた
ことがわかり、この点が、明朝をして、オランダの朝貢を認めない大きな理由の一つであったと推測できる。

この一六二四年に、明朝は使者をバタヴィアに派遣して、オランダの朝貢を認めなかったことになる。しかし、この年に、
台湾の南部にある台南にゼーランドディア城 (Zeelandia) を建築し、東アジア貿易の拠点とした。ここは、当時、明帝国の領
土とは考えられていないが、シナ海貿易に参加するには、重要な拠点であった。このことは、『バタヴィア城日誌』に次によ
うに記されている。

(台湾を抛棄しようと言う意見に対して)

貿易は自然の経過に任せこれを強制すべからず、またさらに有利なる場所を放棄すべからず、諺にあるごとく何事も永
久ならざるがゆえに現状も永続せざるべく、かくのごとき有利なる貿易地はたとえ従前より利益少なくとも隣接各地と
の友誼上これを継続すべきものなり。かくのごとくせば戦争に現在の利益を吞まるるを防ぎ、また有利なる農業その他
により会社が非常に大なる利益を収むることを妨害することなかるべし。殊に現在は成長中にして年々著しく改善し、
一般収入、徴税等は信ぜられざるほど増加すべきがゆえなり。

オーフェルトワートル (Overtwater, Pieter Anthonissen) はまた、中国人の盛んなる渡航により日本は神が我等に
与えたる貿易市場にして、関係なき僅少なる難事のためこれを放棄すべきにあらずと言えり。⁽¹⁰⁾

ここにあるように、ゼーランドディア城はVOCにとって重要な拠点であった。それは、日本との貿易にとってなくてはなら
ない場所であったからである。しかし、この土地は、はじめから目的とされていたと言うより、中国と直接交渉ができず、中
国の領域内に貿易拠点を設けることができなかつたが故に、台湾に拠点を設けたのである。

日本との関係

VOCは、日本の徳川幕府と良好な関係を保ち、貿易を維持していた。しかし、これは、オランダが望むような対等な貿易関係を結んだと言うのではなく、江戸幕府に対してVOCが奉公すると言う形であった。このことは、一六四〇年にVOCの日本商館長フランソワ・カロン (François Caron) が幕府の命令を受けたときの様子からも伺い知ることができる。

汝等が皆ポルトガル人と同じくキリスト教徒なることは皇帝陛下の確聞せられたる所なり。汝等は日曜日を守り、キリスト生誕の年号を屋上破風に全国民に見ゆるよう記し、また十誡、主の祈り、信仰個条、洗礼、パンを割くこと、聖書、モゼス、預言者、使徒等を有し、結局同一にして汝等の差別は小なるものと認む。汝等がキリスト教徒なることは良く前より知れるが、汝等のキリストは別なるものと考えいたり。よって陛下は予を通じて汝等に対し年号を記したる家は（一つも残さず）最近に建築したる北側の家をはじめとし順次破壊して終りに至ることを命ぜらる。

汝等が日曜日を公けに守ることを許さず。その名の記憶を失わしめんがためなり。

汝の国民のカピタンすなわち頭人は、マカオのカピタンの例に倣い、一年以上日本に留まることを得ず、毎年交代すべし。我が国民と良く交わりて宗教を弘むることなからんがためなり。このほか汝等が守るべき事は今後平戸の領主より申し渡すべし。

商館長カロンは皇帝の命令に対しては諾と答うるのみにして、弁解または請願はその後にすべきことを知れるがゆえに、冷静にして快く、しかも尊敬の言をもって、陛下が我等に命ぜられたる所は確実にこれを行なうべしと答えたり。しかして直ちに辞して外に出でしが、次こ何事あるべきか知らんと欲し、広間に坐して待ちいたり。しかして同所にいたる貴族らより、特使が商館長の迅速にして確固たる返答を聞き驚きかつ喜び、かくのごとき事あるしと思わず（多数のキリスト教徒を扱いたれば）何か歎願し訴えまたは懇請すべしと考えしが、これを為さず、多くの紛擾と流血を免

れたりと言ひし由を聞きたり。

同所を去りて家に帰りたる後、もし特使より平戸の領主および長崎奉行列坐の席にて申し渡しありたる時、何か弁明しまたは嘆願したらば、商館長は特使の面前において打倒され（勇士二十人準備を整えて坐しいたり）商館員は皆獄に投ぜられ、また島々に待機せし肥後、筑後および有馬の領主の兵を招きて、会社の諸船員を撃滅する手筈なりし由、密かに商館長に告ぐる者ありたり。

夕刻頃平戸の領主より、特使が（家屋の破壊速やかに行なわれざる時は）重立ちたるオランダ人八人ないし十人を殺す計画をなせる由を知らせ、商館長もし猶予を請い、この事を会社に好意を有せし讃岐殿、加賀殿、内匠殿その他を介して再び宮廷に訴えんとせば、特使は少しも待つことなくその命ぜられたる所を実施せしむべしと言ひ、商館長カロンに一層急ぐべきことを暗示し、この事はその領内において起こりたるがゆえに、彼にも大いなる損害を及ぼす虞れありてはなほ遺憾となせる由を伝えたり。カロン君は領主に感謝し、直ちに船より二百人を召集し、商人および町民の出したる日本人約同数とともに終夜働きて、北の倉庫内に在りし貨物の大部分を持ち出し、各室および戸外に置き、また商人の倉庫に納め、翌日はさらに多数の人を使用して屋根は大部分取り除きたり。⁽¹¹⁾

もし、商館長が、何か反論したり、誓願したならば、直ちに殺されかねなかつた状況があり、前年に平戸に作った石造りの倉庫を幕府の命令通り破壊している。つまり、江戸幕府としては、VOCがどれだけ忠実に命令を実行するかを試したわけであり、カロンの対応は、これに合格するに十分なものであつたわけである。しかし、この対応の仕方は、ライエルセンが中国と交渉に当たっているとき、時に武力を用いたのとは、まったく逆の対応の仕方である。

この商館長カロンは、日本の状況を良く知っていたようである。彼の妻は、日本人であり、さらに、一六三三年に台湾で起きた、VOCと日本の争いの時にもその仲介役として働いていたからである。それ故、彼は、オランダの要求を全面に押し出すよりも、日本の習慣に従うことを選んだと考えられる。それというのも、日本との貿易が、東アジアのみならずVOCにとつ

て、最大の利益を上げるものであったからである。

当時の日本は、世界第二位の銀産出国であり、世界第一の中国の絹の消費地であったからである。日本は、歴史的に、中国を中心とする朝貢冊封体制に組み込まれることを拒否することが多かった。特に一六世紀には、寧波事件以来、日本は明朝に朝貢することができなくなっており、中国の商品、特に生糸や絹織物を、倭寇に代表される密貿易によってしか、手に入れることができなくなっていた。

このような状況下において、中国の密貿易を行う海商と並んで、ポルトガル商人やVOCが中国の生糸を日本に運んで来るようになっていた。その対価として、日本の銀を得ることができたのである。⁽¹²⁾この貿易は、一六三九年以降、日本人が海外に出られなくなってからは、それまで日本人の持っていた貿易ネットワークをVOCが受け継ぐ形となり、オランダに多大の利益をもたらしたのである。

東方アジアの世界体制におけるVOC

東アジアのみならず、東南アジア各国は、明朝に朝貢していた。皇帝によって冊封された者のみが、勘合符を与えられ、中国に朝貢できたわけである。これは、中国を中心とした体制であるが、朝貢国同士は、対等な関係となり、勘合符を持つ者が、正式の使節と認められて、相互に貿易を行えるという面を見落とすべきではないであろう。たとえば、琉球は、明朝に朝貢しているが、勘合符があることにより、船をマレー半島のマラッカにまで派遣し貿易を行っている。マラッカで求めた東南アジアの物産と琉球の物産を中国に運び、下賜品としてもらった物資を日本や東南アジアに売って利益を上げていた。⁽¹³⁾

このシナ海貿易の状況から鑑みると、一七世紀には、VOCは、この中国を中心とする体制の中に組み込まれることはなかった。清朝が成立し、台湾に寄った鄭氏一族との抗争が続いた時期、清朝とVOCが手を結ぶことがあったが、それでも、VOC

Cが中国と直接貿易を行うことができなかったのである。

本来であれば、VOCは、シナ海貿易において、利益を上げることが難しかったはずである。というのは、世界で最も求められていた絹や、磁器などの商品を中国に朝貢して下賜されることがなく、また、中国に貿易基地を設けることができなかったため、中国で商品を購入することも不可能であった。しかし、上述したごとく、日本との貿易で多大な利益を上げていたが、VOCの東方貿易を成功に導いた。

江戸幕府に統治された日本自身も、中国を中心とした冊封朝貢体制の中に組み込まれていなかった。豊臣秀吉のいわゆる「唐入り」により、日本は、中国に朝貢することができず、徳川政権も明・清朝と正式な外交関係を結ぶことができなかった。これは、日本自身が、中国の宗主権を認めることができなかったことによる。

そのために、日本を自分を中心とした体制を作らざるを得なかった。しかし、ここで作られた体制が、「鎖国」と呼ばれるものであるが、その内実は、中国の冊封朝貢体制の模倣といっても良いものである。「鎖国」体制は、国を完全に閉ざしていた状態ではなく、江戸幕府による外交・貿易の独占体制であり、海外のものが「夷狄」として扱われ、彼らが江戸幕府に朝貢してくるといふ建前になっている。四つの貿易口を作り、松前藩によるアイヌ貿易、対馬藩による朝鮮貿易、島津監視下による琉球貿易と幕府直轄の長崎貿易である。この長崎貿易は、中国商人とVOCが貿易の相手であった。⁽¹⁴⁾

VOCは、長崎という場所を得、日本に「朝貢」することによって、日本の金(大判・小判)・銀(丁銀)・銅(銅銭)を得ることができた。これらの貨幣は世界貨幣として通用するために、中国との貿易からでは得られない利益を上げたのであった。中国を中心とする体制の中であって、それを認めない日本とオランダが結ぶことによって、貿易の利益を得たのであった。

このことは、本来、ヨーロッパ人に取って、目的たる「シナ」との交渉が成功しなかったが、そのかわり日本という交易地を見つけたことにより、大量にある銀を獲得することができたのである。

VOCと中国人

一七世紀、VOCと中国との直接の貿易関係は成立しなかった。しかし、このことは、VOCと中国人の関係が希薄なことを示すわけではない。

VOCと中国の最初の接触である、ワーベックの艦隊には、中国人が同行している。その中で、特に注目すべきは、恩浦 (Inpo) である。この中国人は、福建省泉州の出身であるが、オランダ・ゼーランド会社の使用人であり、一六〇三年にオランダから戻ってきており、オランダ改革派の信者であった。この事實は、彼がオランダの言語と慣習に通じていることが想像させる。彼を通じて、さらに四人の中国人が雇われている。恩浦が重要人物であろうことは、彼が二〇〇〇レアル、他の中国人は三〇〇〇から四〇〇〇レアルの報酬を受け取ることになっていることから明らかであろう。

恩浦は、中国との直接交渉が失敗に終り、パタニに帰る船上でワーベックに中国との交渉の方法を提案している。その提案の一つは、オラニエ公からの朝貢使として、北京語を話せる中国人を雇い南京経由で北京に派遣することである。この案はワーベックによって「不可能である」とされ、却下された。もう一つは、全ての平和的交渉が徒勞に終わったときに行われる案として、福建、広東の港灣を封鎖し、生活のできなくなった中国人が反乱を起こすのを待つ。反乱が起きれば、VOCは、中国政府に力を貸し、その見返りとして、貿易を許可してもらう。これは、恩浦によれば、ポルトガルが取った手であるとする。実際、クーンが一六二二年にライエルセン艦隊を派遣したが、恩浦案が基になっているといわれている。この点からみても、恩浦は、VOCにとっての参謀の一人と言えよう。⁽¹⁵⁾

また、パタニのシャーバンダルである、ダト・シネララ (Dato Sinerera) も忘れてはならないであろう。この艦隊が中国に行くに当たり、漳州の大官宛の手紙を書いている。名前からは明らかではないが、彼自身も中国系である。さらに、張燮によって書かれた『東西洋考』にも、潘秀・郭震といった人々がオランダ艦隊の手助けをしていることを記している。⁽¹⁶⁾

さらに、VOCには、一六一〇年代から、イクワン (Iquan: 一官) という通訳がいた。この人物は福建省の出身であるが、後に会社を辞めて、VOCの最大の競争相手となった。鄭芝龍である。彼は一六二四年以降、平戸から台湾に拠点を移した海商グループに属するようになった。このグループは、顔思斉に率いられたものであるが、彼の死後、鄭芝龍を頭目とし、海上貿易の派遣を握っていた。

VOCははじめ、彼を海賊として扱っていたが、次第にその実力を認めざるを得ず、一六三〇年には、契約を締結するに至った。さらに、日本の「鎖国」が実行されるに至っては、共同して貿易を行うことを考えていた。VOCの記録には、

館長 (フランソワ・カロン) の考えによれば立派なる絹織物 (今日までポルトガル人は常に得たるが我等は得ること能わざりし) はポルトガル人の智恵または努力によりて得たるものにあらず、また会社がこれを得ざりしは我等の怠慢によるにあらず、全く有力にして敏捷なる中国人 (マカオ人が常に共同して貿易を行ないたる) の援助によりて得たるものなり。中国人は製品の注文に心を用い、ポルトガル人はその販売に努力し、かくのごとくして相互扶助し、ポルトガル人のみにて不可能なる成功を遂げたり。このゆえに商館長は一官と貿易の契約を結ぶは宜しからず、もし彼の資金を会社の資金に加え、損害をも分担することとして、会社がよき貨物を手に入るよう助力したるうえ、利益もまたこれを分かつこととせば、彼はその収益増加するがゆえにますます事業に熱心となること、ポルトガル人と広東の中国人との間に実現したるがごとくなるべし。⁽¹⁷⁾

とあり、ポルトガル人と中国人の共同作業によって日本に大量の絹が輸出されていたが、VOCと鄭芝龍が共同することによって、同様の利益を上げることができると考えていたのである。

しかし、『バタヴィア城日誌』一六四一年二月二三日の条に

中国官人一官は、日本貿易に関する契約案を無視し貿易を中止する意志なきを示し、南季節風期にはジャンク船三艘に絹織物および少量の生糸を積みて日本に派遣せり。日本航海を援助するために、長官は経験ある中国人を介して日本

より銀を得て帰る時は十二月および一月に福州の河の少しく北に着すれば可なり、中国においてはこれに対し何等の困難なかるべしと一官に伝えしめたり。⁽¹⁸⁾

とあるように、VOCと鄭芝龍の共同貿易は、あまりうまくいっていなかったようである。

この鄭芝龍が、海上貿易の最大の実力者になった頃から、VOCと中国海商の関係は必ずし円滑であるとは言えない状況になってきた。一つには、鄭芝龍が、明朝から、都督の位を授かり、シナ海の制海権を握ったために、中国商人が、鄭芝龍に逆らえなくなったことが大きな理由であろう。彼に、毎年お金を納めて「令旗」を購入しないと、航海の安全が保障されないからである。このような状況であれば、商売の競争相手であるVOCに有利になるようなことを鄭芝龍が許すわけがない。事実、鄭芝龍の圧力によって、マカオのポルトガル人が苦しんだという記述がある。

一官は他の官人等とともに引き続きマカオのポルトガル人を苦しめつつあり。彼等は全く貿易を行なうことを得ず、広東との貿易も殆ど停止せり。日本より持ち帰りたる貨物は二、三艘のジャンク船に積みてマニラに輸送すべし。⁽¹⁹⁾

VOCは、一七世紀初頭には、恩浦などの協力を得ることができたが、半ばになると、鄭芝龍によって、貿易の利益を以前ほどはあげることができなくなってきてしまった。とくに、VOCと中国商人の資金力の差は大きかった。

一六四七年、ヴェトナムのトンキンでVOCが生糸の買い付けを行ったとき、その高官と値段の交渉をしたが、後から来た中国商人のほうが、より高い値段で生糸を購入したため、VOCは目的を達成することができなかった。VOC文書には、中国商人のトンキン王や高官に送る賄賂の量は、オランダの船が一年で運ぶ量よりも多い。⁽²⁰⁾

と記している。つまり、鄭芝龍を中心とする中国商人は、その組織力においても、経済力においてもVOCのそれよりも勝っていたのである。

しかし、すべての中国人が鄭芝龍と同じく、VOCにとって不利な行動をとったわけではない。ハンブアン (Hambuan) のように、鄭芝龍が、VOCをやめた後、通訳として働きだし、貿易に際しても数々の助言をなしている。しかし、彼は、

一六四〇年十一月四日に彼の乗ったジャンクが沈没したために命を失っている。⁽²¹⁾

鄭芝龍の長男である鄭成功が、父の後を継いで鄭氏の中心となると、VOCは、さらに煮え湯を飲まされることとなる。貿易の上で苦勞をするのは、以前から同じであるが、鄭成功は、一六五八年の南京攻略が失敗すると、一六六一年VOCの拠点である台湾に攻め込み、翌年攻略してしまった。シナ海貿易の重要な拠点をVOCは失ったことになる。このために、オランダは、鄭氏政権の敵である清朝と協力して、台湾を攻めようとしたが、結局失敗し、回復することはできなかったのである。

一七世紀半ばからは、VOCは、中国商人と共同で貿易を行うというよりも、中国商人とどう競争するかという時代になっていた。中国と直接交易ができないため、日本・台湾や東南アジア各地でVOCと中国商人は競争を繰り返すことになったのである。しかし、経済力からいっても、中国商人のほうが、VOCよりも遥かに強力であった。江戸幕府が、一六八五年より「定高貿易」という方式をとり、中国人、オランダ人の貿易額の上限を定めた。それによると、中国人は、六、〇〇〇貫目まで認めるのに対し、VOCは、三、〇〇〇貫目だけであった。このことから、中国商人の経済力の大きさがうかがえよう。⁽²²⁾

ここで、注意すべきことは、この年には、台湾によった鄭氏政権はすでに存在していないことである。一六八三年に、施琅の率いる清軍の前に、台湾の政権は降伏してしい、この後、清朝の一省となった。また、一六六一年から施行されていた遷界令も一六八四年には解除されているのである。つまり、清朝と鄭氏政権の抗争がなくなり、中国海商が自由に海外に出られるようになったからである。そのために、多くの中国商人が日本に来るようになった。彼らの持つ経済力が、VOCのそれを凌いでいたのである。だからこそ、江戸幕府は「定高制度」を設けて、大量の金銀を海外に持ち出されないように制限したのである。

一八世紀

一七世紀が、オランダの黄金時代であったことは、衆目の一致するところである。この世紀、VOCは朝貢体制に組み込まれることなく、鄭芝龍・成功に代表される中国商人と競争して貿易を行い、日本と良好な関係を持つことによって、利益を得ることができた時代である。

次の一八世紀になると、日本から以前ほど、金銀銅が出なくなり、その意味では、対日貿易の利益が出なくなっていた時代である。しかし、中国との貿易で変化が見られた。一七二八年にオランダから、「コックスホールン」(Coxhorn)という船を直接広東に派遣した。一七二九年八月にマカオに到着し、交易を行うことができた。オランダに戻った後、多大な利益を上げたのである。⁽²³⁾

この時以後、広東貿易に参加することが、VOCの目的となった。一七三五年に、バタヴィアから二隻の船を広東に送った。ただ貿易するだけでなく、この地に商館を建てることを目的としていた。しかし、最初の年には、成果を上げることができなかった。というのも、この地に商館を建てるべき交渉したのだが、時の皇帝、雍正帝の許可が下りなかったからである。

この後、しばらくは、九月から翌年二月までの交易の季節に船を広東に泊めて、交易する体制をとらざるを得なかった。一七四九年にようやく、商館を建設する許可が下りた。一七五〇年以降は、ここに常駐することができたのである。広東におけるVOCと中国商人の関係は、大変良好であった。ちょうど、一六世紀から一七世紀のポルトガル人と広東の中国人の関係と同じであった。

この時代、ヨーロッパでは、「シノワズリー」(chinoiserie)という中国趣味が流行し、中国の茶を飲む習慣が広まりつつあった。そのために、中国の磁器、茶などがヨーロッパに大量に輸入されるようになっていた時期である。VOCもこの貿易に参加し、利益を上げていた。⁽²⁴⁾

結 論

オランダのみならず、西アジアからヨーロッパの人間に取って、東方、特に、「シナ」と呼ばれた地域は、ものの豊かな地域であり、一五世紀以降、ヨーロッパ人がインド洋に乗り出してからも、貿易の利益を挙げる地域として、垂涎の的であった。しかし、中国の秩序体制である、冊封朝貢体制の中に、ヨーロッパ諸国が組み込まれることは、難しかった。オランダの場合も同じで、中国に、何度か使節を送ったり、交渉をしたりしているが、一八世紀半ばになるまで成功しなかった。しかも、鄭芝龍・成功の親子により、VOCの貿易は制限された。だからこそ、台湾という貿易拠点を作り、日本という、世界第二位の銀産出国（さらに金・銅の産出国）を貿易のパートナーとすることによって、東方貿易の利を得ることができたのである。

このために、本来中国との貿易で利益を挙げるものが、日本との関係で利益を挙げることができた。一七世紀のオランダにとって、「極東」は、儲かる場所であった。しかし、それは、「中つ国」ではなく、さらに東方の「日出づる国」であった。

一八世紀になると、この状況は、一変した。日本はもはや以前ほどの金銀銅を産出することもなく、中国の絹を購入することもなかった。VOCにとって、もはや日本は貿易のパートナーである必要がなくなったのである。しかし、中国の唯一の貿易港である広東に拠点を設けることにより、中国と直接交易ができるようになったのである。この時は、中国の茶をヨーロッパに運ぶことにより利益を上げることとなった。一五九六年に始めて東方に艦隊を派遣して以来、一五七年たった、一七四九年になってはじめて、『東方案内記』に書かれた「シナ」に商館をおいて恒常的に直接、貿易することができるようになったのである。

注

- (1) 矢沢利彦訳注、メンドーサ『シナ大王国誌』、岩波書店、一九六七
- (2) 岩生成一他訳注、リンスホーテン『東方案内記』、岩波書店、一九六八
- (3) Leonard Blussé en Jaap de Moor, *Nederlanders Overzee, Uitgeverij T. ever. B.V.* 1983
- (4) ちなみに日本については、第二章「ヤパン島について」と一章しか設けられていない。この時点では、日本より中国のほうに関心が持たれていたことが、この点からも証明できよう。
- (5) 岩生成一他訳注 同書、二二二―二二六頁
- (6) 同書、二二七頁
- (7) この最初の艦隊の航海の詳細については、Blussé, *ibid.*, pp.100-108. を参照のこと。
- (8) このワーベイク艦隊の中国来航については、奈良修一「オランダ艦隊と中国人についての一考察 ―万曆三二年ワーベック艦隊澎湖島来航と中国人」、『東方』、第一〇号（一九九五）、二六八―二七八頁 を参照のこと
- (9) 村上直次郎訳注『バタヴィア城日誌』第一巻、二六―二七頁
- (10) 前掲書、第三巻、九一―九二頁
- (11) 前掲書、第二巻、八五―八六頁
- (12) 全漢昇「明中葉後中日間の絲銀貿易」『中央研究院歴史語言研究所集刊』五五―四、六三五―六四九
- (13) 高良倉吉『琉球王国』岩波新書二六一、一九九三
- (14) 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版社、一九八八
- (15) 奈良前掲論文
- (16) 『東西洋考』巻六「外紀考」や巻七「税璫考」に、オランダとの交渉の時、中心的な役割を果たした中国人として「李錦」の名前がでていますが、本文ではあえて触れなかった。何故ならば、この人物が実在したとは考えにくいためである。詳細は、奈良前掲論文を参照のこと。
- (17) 『バタヴィア城日誌』第二巻、七一―七二頁、一六四〇年二月三―四日
- (18) 前掲書、第二巻、一四八頁

- (19) 前掲書、第二卷、一四八頁
- (20) VOC 1166
- (21) 『バタヴィア城日誌』、第二卷、二八一―二九頁
- (22) 永積洋子『唐船輸出入品数量一覽』、創文社、一九八七、一八頁
- (23) Inventaris van het Archief van de Nederlandse Factorij te Canton 1742-1826, door Juliani L. Parani getypt door Mevr. Heuvelink, 1972, Algemeen Rijksarchief
- (24) この時代のヨーロッパにおける茶の受容については、矢沢利彦『東西お茶交流考』、東方書店、一九八九を参照のこと。